

新版日本文学史 中世

久松潜一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

至文堂刊

新版日本文学史 3 中世

昭和48年 6月5日 発行

ひき まつ せん いち
久松潜一 編

発行所 至文堂

東京都新宿区払方町27

東京 (260) 2211(代)

発行者 佐藤泰三

印刷 株式会社文栄社

製本 大口製本印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なって、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに關する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかりと立てることが目標であった。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることをのぞいたために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもともと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果たすことはできるであらう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・片崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顕智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかつた佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松 潜 一

目次

概説

時代区分について (一) — 中世の社会情勢 (二) — 国民的・集团的傾向 (三) — 宗教の時代 (四) — 戦場と寺院 (五) — 公家と文学 (六) — 武士と文学 (七) — 僧侶と文学 (八) — 隠者・草庵の文学 (九) — 庶民的文学の成立 (一〇) — 結び (一一) — 中世文学の研究について (一) 明治大正期 (二) — (三) 昭和前期 (四) — (五) 昭和二十年以後 (五)

一

前期

三

第一章 和歌

歌

三

一 藤原俊成と千載集

三

藤原俊成伝 (一) — 藤原俊成之歌論 (二) — 千載集の成立 (三) — 千載集の特色 (四)

二 新古今集の成立とその特色

三

藤原定家の新風 (一) — 後鳥羽院と新古今集 (二) — 新古今集の歌人 (三) — 新古今風の特色 (四) — 新古今風を成立せしめたもの (五)

三 新古今集から新勅撰集への推移

三

藤原定家の歌論(四二)——新勅撰風を成立せしめたもの(四七)——源実朝と建礼門院右京大夫(四九)

四 和歌の衰微沈滞.....五二

藤原為家の家業継承(五二)——統後撰集と統古今集(五三)——一条・京極・冷泉三家の分立(五四)

五 玉葉集.....五五

京極派の和歌(五五)——京極為兼の略伝(五七)——為兼の歌論(五九)——為兼の作風(六〇)——京極派の活動(六四)——京極派の限界(六六)——玉葉和歌集の成立(六七)——玉葉集撰者をめぐる争論(七〇)——玉葉集の編纂態度(七三)——玉葉集の歌風(七五)——京極派の主要歌人(七七)

第二章 歌謡.....六二

一 概観.....六二

今様の存続(六二)——今様の周辺(六三)

二 宴曲.....六三

宴曲の名称(六三)——宴曲の成立(六四)——宴曲の現存曲と異説(六五)——宴曲の作者と鎌倉文化圏(六六)——宴曲の題材(六七)——宴曲の文芸性(六九)——宴曲の隆替(七二)

三 和讃.....六三

新鸞の和讃(六四)——一遍の和讃(六六)——他阿・中聖・託阿の和讃(六九)——浄

業和讀との關係（九七）

第三章 物 語

一 序 説

二 風葉和歌集と無名草子

風葉和歌集（九六）——無名草子（一〇〇）

三 作者と読者

作者（一〇一）——読者（一〇二）

四 鑑賞と批評

無名草子の美理念（一〇三）——物語評價の基準（一〇六）

五 時代の概観

物語の伝流と変遷（一一〇）——創作の盛衰（一二五）

六 作品解説

時代区分（一二七）——鎌倉前期の現存作品（一二七）——前期の散逸物語（一三〇）——鎌倉後期の作品（一三六）

七 研究史概略

第四章 歴 史 物 語

一 今 鏡

二	水鏡	作者 (二三) — 今鏡の構想・組織 (二三) — 成立年代 (二三) — 伝本 (三五)	三三
---	----	---	----

	書名 (三五) — 作者 (三六) — 構想 (三六) — 成立年代 (三七) — 組織 (三七) — 扶桑略記との関係 (三七) — 伝本 (三九)	
--	---	--

三	愚管抄	作者 (三九) — 道理観 (四〇) — 成立年代 (四〇) — 組織と執筆態度 (四〇) — 伝本 (四一)	三九
---	-----	---	----

五	軍記物語		四六
---	------	--	----

	はじめに		四六
--	------	--	----

	一 軍記物語の形成前史		四七
--	-------------	--	----

	二 保元・平治物語の形成		四九
--	--------------	--	----

	三 平家物語の成立		五〇
--	-----------	--	----

	四 承久記と平家物語以後		五一
--	--------------	--	----

	増補訂正		五二
--	------	--	----

	軍記物語研究の現状 (七〇) — 将門記・陸奥話記ほか (七一) — 保元物語 (七六) — 平治物語 (七八) — 平家物語 (八〇) — 承久記 (九三)	
--	---	--

六	説話		九五
---	----	--	----

	一 概説		九五
--	------	--	----

説話集の盛行（二五）——説話文学の概念（二六）——概観的把握（二九）

二 一般説話集……………一〇三

伝承関係の究明（二〇）——編纂意図と編成（二〇）——古事談・続古事談（二〇）
——十訓抄（二七）——古今著聞集（二〇）——宇治拾遺物語（二〇）——今物語（二二）
——世継物語・唐物語・蒙求和歌（二二）

三 仏教説話集……………一三三

編纂の意図（二二）——宝物集（二四）——発心集（二五）——閑居友（二六）——撰集抄
（二六）——沙石集・雑談集（二七）——仏教説話集における随筆的評論的傾向（二九）

四 説話集以外の説話……………一三〇

軍記物語における説話性（三三）——徒然草における説話性（三三）——関連研究
の推進（三三）——研究のための手びき（三四）

第七章 日記・紀行……………一三五

一日記文学……………一三六

建春門院中納言日記（三三）——建礼門院右京大夫集（三三）——弁内侍日記（三三）
——中務内侍日記（三三）——家長日記（三三）——春の深山寺・嵯峨のかよひ（三四）
——とはすがたり（三五）

二 紀行文学……………一三七

うたたねの記・十六夜日記（三七）——海道記・東関紀行（三四）——その他（三四）

第八章 随筆・法語……………一四三

一方 丈 記

鴨長明略伝 (二四) — 方丈記の特質 (二四) — 池亭記との関係 (二五) — 方丈記の諸本 (二五) — 和歌隨筆「無名抄」 (二五)

二四三

増補 訂正

二五三

鴨長明の父長継 (二五) — 一条兼良筆本方丈記 (二五) — 和歌隨筆無名抄の成立年代 (二五) — 方丈記の精神性 (二五)

二 徒 然 草

二五五

兼好の略伝 (二五) — 兼好社会圈 (二五) — 徒然草の制作時期 (二六) — 徒然草を貫く作者の人間味 (二六) — 京都人の意識 (二六) — 下層貴族としての知識人的優秀さ (二六) — 五十歳の知恵 (二六) — 徒然草の生れた条件 — 出家人の生活 (二六) — 個人的人間の自覚 (二七) — 青春の回顧 (二七)

増補 訂正

二七四

兼好の没年と家族的生活圈 (二七) — 徒然草の異本と制作時期 (二七) — 徒然草の文芸性 (二七)

三 法 語

二七六

法語の範囲 (二七) — 法然の伝記と著述 (二七) — 親鸞の伝記と法語 (二八) — 一遍の伝記と法語 (二八) — 他阿の法語 (二八) — 向阿と三部假名鈔 (二八) — 一言芳談 (二八) — 日蓮の伝記と述作 (二八) — 道元の法語と正法眼蔵 (二八) — 法語の時代的特色 (二八)

増補 訂正

二七九

法語の成立と分類 (二六九) — 宗教性と文芸性 (二九二) — 法語の享受と伝承の問題 (二九七)

後 期 二九七

第一章 漢 詩 文 二九八

一 序 説 二九九

中世漢詩文的主流 (二九八) — 中世文学における外来的要素 (三〇〇) — 時期区分 (三〇一)

二 勃 興 期 三〇二

禪宗の移植と發展 (三〇二) — 禪文学の勃興 (三〇三) — 文学活動の發展 (三〇五) — 勃興期の特質 (三〇六)

三 隆 盛 期 三〇八

禪宗の隆盛と五山制度 (三〇八) — 文学活動の進展 (三二〇) — 作風の意義 (三二三) — 隆盛期の特質 (三二三)

四 衰 退 期 三二七

禪宗の退廃 (三二七) — 文学活動の様相 (三三〇) — 衰退期の特質 (三三三)

五 結 び 三三三

中世漢詩文の意義 (三三三)

第二章 和 歌 三三八

一 概 観……………三六

二 風雅集とその前後……………三七

風雅集の成立まで (三三) — 風雅集の成立と花園院 (三六) — 風雅集の歌風 (三〇) — 後期京極派の歌人と歌合 (三三)

三 新千載集・新拾遺集・新後拾遺集……………三三

三勅撰集の成立 (三三) — 新千載集の作家と作品 (三四) — 新拾遺集の作家と作品 (三五) — 新後拾遺集の作家と作品 (三六)

四 南北朝文学としての和歌 — 頼阿・良基・兼好・慶運など……………三六

頼阿とその歌風 (三六) — 二条良基 (四一) — 兼好の和歌 (四二) — 浄弁と慶運 (四三) — 和歌四天王 (四五)

五 新葉集・李花集など — 南朝の和歌……………三六

新葉集の成立と作者 (四六) — 新葉集の歌風 (四七) — 李花集その他 (四九)

六 冷 泉 派 — 耕雲・了俊・正徹・心敬……………三九

耕雲の歌論 (四九) — 今川了俊 (五二) — 正徹の作風 (五三) — 心敬 (五四)

七 新統古今集・古今伝授その他……………三五

新統古今集と堯孝 (五五) — 室町期の歌合・歌学書 (五六) — 常縁と古今伝授 (五七)

八 私撰集・類題集……………三六

南北朝・室町期の主な私撰集 (三六) — 室町期の私撰集と類題集 (三六)

第三章 連歌

一 短連歌と鎖連歌

短連歌 (三六三) — 鎖連歌 (三六四)

三六三

二 鎌倉時代の連歌

鎌倉初期の連歌 (三六六) — 鎌倉中期の連歌 (三六九) — 鎌倉末期の連歌 (三七二)

三六六

三 南北朝時代の連歌

前期の連歌 (三七五) — 菟玖波集の成立 (三七六) — 連歌新式の制定 (三七七) — 前期の主要作家 (三八〇) — 南北朝後期の連歌 (三八三) — 二条良基の連歌論 (三八六) — 後期の主要作家 (三八四) — 南北朝時代の主要作品 (三八七)

三七五

四 室町時代初期の連歌

連歌の衰退期 (三八八) — 前期の主要作家 (三八九)

三八八

五 室町時代中期の連歌

永享期の連歌 (三九二) — 七賢時代 (三九四) — 新式今案の制定 (三九四) — 応仁の乱前後の連歌界 (三九五) — 連歌復興期の主要作家 (三九六) — 竹林抄の編集 (四〇二) — 応仁の乱以後の連歌師と旅 (四〇三) — 古典文化継承者としての連歌師 (四〇三) — 文明以後の主要作品 (四〇三) — 新撰菟玖波集の撰進 (四〇五) — 連歌の地方普及 (四〇七) — 中期の主要作家 (四〇八)

三九二

六 室町時代後期の連歌

連歌の固定化 (四一二) — 後期の主要作家 (四一四)

四一二

七 俳諧の連歌……………四二六

俳諧の連歌の起源（四二二）——山崎宗鑑（四二九）——荒木田守武（四三三）——俳諧の祖の設定（四三三）——俳諧の作者（四三四）——犬筑波集の作品（四三五）——守武・宗鑑以後の俳諧（四三九）

第四章 歌 謡……………四三三

一 閑 吟 集……………四三三

五節の舞の小歌と小歌時代（四三三）——閑吟集の歌謡（四三三）——閑吟集の小歌（四三九）——宗安小歌集（四四〇）

二 小歌圏の歌謡……………四三七

田植草紙と狂言小歌など（四三七）——踊組歌から女歌舞妓踊歌へ（四四〇）

三 隆達の小歌……………四五二

隆達と隆達の小歌（四五一）——隆達小歌の形成と表現・律調（四五〇）

第五章 物語草子……………四五六

後期の物語草子と御伽草子（四五六）——作者と読者（四五九）——後期の作品の多様性（四五七）——後期の作品の類型性と分類（四六〇）——一 公家に関するもの（四六二）——二 僧侶・宗教に関するもの（四六三）——三 武家に関するもの（四六四）——四 庶民に関するもの（四六五）——五 外国に関するもの（四六七）——六 異類に関するもの（四六七）——後期の物語草子の特色（四六八）——テキストの翻刻紹介について（四七〇）

第六章 歴史物語……………四七三

一 増鏡……………四七三

増鏡の諸本と編成(四七三)―増鏡の内容(四七四)―増鏡の手法(四七五)―成立年代(四七六)―作者について(四七六)

二 神皇正統記……………四八一

北畠親房の略伝(四八一)―神皇正統記の伝本(四八二)―神皇正統記執筆の動機・目的(四八三)―文学的史論としての意義(四八五)

第七章 軍記物語……………四八七

一 太平記……………四八七

太平記の構想(四八七)―太平記の名義(四八七)―作者の問題(四八九)―生成の問題(四九〇)―現存本の成立(四九一)―諸本の研究(四九二)―影響関係(四九三)

二 曾我物語……………五二三

曾我物語の構想(五二三)―作者について(五二四)―生成の問題(五二五)―成立の要因(五二六)―流布本の成立(五二七)―諸本の研究(五二八)

三 義経記……………五三九

主題構想(五三九)―作者について(五四〇)―生成の問題(五四一)―成立年代(五四二)―諸本の研究(五四三)―作品論(五四四)―伝説との関連(五四五)

第八章 説話……………五四三